

3 回生 小川達也

1. はじめに

大分県は温泉の源泉総数、湧出量ともに全国 1 位であり、全国的にみても温泉が多いという特色がある。また、大分県内で源泉数を市町村別にみると、別府市が 1 位で、由布市が 2 位となっている（それぞれの出典：大分県「温泉データ」）。宿・ホテル予約サイトの「じゃらん net」のユーザーが選ぶ人気温泉ランキング（2015 年）では、箱根温泉、草津温泉に次ぐ全国 3 位に由布院温泉が、4 位に別府温泉郷がランクインしている<sup>1</sup>。以上のように、大分県の温泉は統計的にみても余暇を楽しむ人々の視点からみても、重要なものであると言える。

今回は大分県の温泉観光地の中から由布院温泉を取り上げ、由布院の観光とまちづくり、近年観光客からの注目度が高い湯の坪街道の移り変わりについて考察していく。温泉地の土地利用の変化については、妻鹿・橋本（2006）が登別温泉の観光集落における土地利用の変化を明らかにした先行研究がある。由布院温泉においては、小堀（2000）が湯の坪街道周辺における宿泊施設と観光施設の分布などから観光空間の構造を分析したのものがある。しかし、それ以降は由布院の観光空間や景観の変化について研究されたものはない。

そこで本稿では、1999 年から 2015 年にかけて由布院の街並みがどのような変化をしたのか、その要因について調査した。湯の坪街道と呼ばれ始めた時期は不明だが、朝日新聞では 2001 年に、読売新聞では 2002 年に記事で名称が使用されていた。湯の坪街道という名称が一般的になってきたのは 2000 年頃と判断できる。由布院の人気観光地となっている湯の坪街道という名称が一般的になってきた 2000 年ごろからの街並みの変化を分析することは、由布院の観光を捉える上で重要であろう。また、街並みの変化はそこに暮らす住民にも影響を与えることになる。住民や行政がどのようなまちづくりを進めていったのか、その点についても分析をしていく。調査は、店舗や旅館の営業者に対するヒアリングにより行い、それも踏まえながら由布院の観光とまちづくりについて考察する。

なお、本稿で使用する「由布院」という地名は、1186 年の後白河院庁下文案において最初に使われた（下中 1995）。一方で「湯布院」という地名は、1955 年に由布院町と湯平村が合併する際、両地名から文字を取って「湯布院町」となったために誕生した行政上のものである。本稿では観光としての由布院やそれに伴う湯の坪街道の変化を考察していくため、基本的には「由布院」を用いることにする。

<sup>1</sup>調査時期は 2015 年 8 月 18～26 日、『じゃらん net』会員または『じゃらん net』予約者に対してインターネット上で行なわれたアンケート。有効回答数は 12,062 人。全国 331 の温泉地を選択肢として設定し、回答者がこれまでに行ったことがある温泉地のうち「もう一度行ってみたい」温泉地を尋ねた。

## 2. 由布市における観光

由布市は大分県の中部に位置し、2005年に挾間町、庄内町、湯布院町が合併して誕生した市である。人口は35,879人（2015年8月末）である。1980年を基準とした人口増減率を図1に示した。人口増加率は旧3町村で増減率に大きな違いがみられる。最も増加率が高いのは挾間町で、1980年から増加の傾向を続けている。由布市観光商工観光部商工観光課（以下、由布市と表す）によると、挾間町は大分市へのベッドタウンであるため人口増加率が高い。一方で湯布院町と庄内町では減少の傾向があるが、湯布院町ではゆるやかである。人口という点からみると、由布市は特徴の異なる3町村が合併した市であると言える。

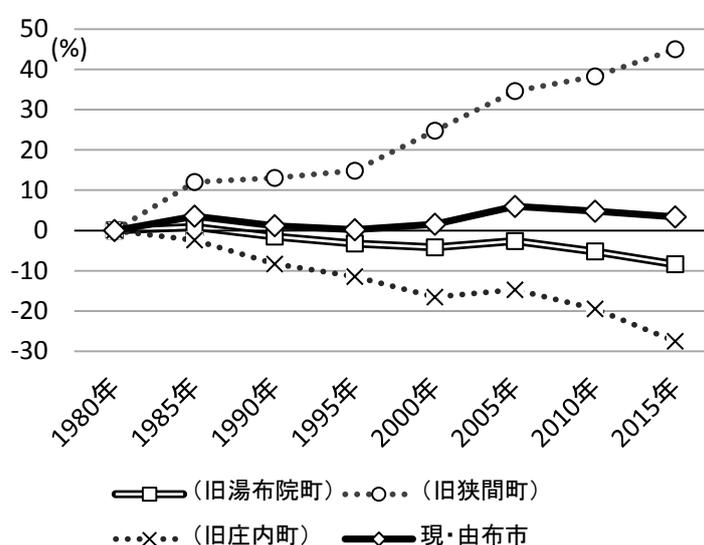


図1 由布市における人口増減率（1980年を基準）

出典：国勢調査，由布市へのヒアリング

次に観光に特化してみていく。図2は旧湯布院町における年間の宿泊客数、日帰り客数の2005年を基準とした増減率を示した図である。宿泊客数をみると2003年にピークに達していることがわかる。2005年の宿泊客数は約80万人であり、以降は増加した年もあるが概ね減少傾向にある。2013年には約68万人と2005年比で-15%となった。また2005年の日帰り客は約245万人であり、宿泊とは異なって1995年から増減率に大幅な変動はない。

続いてその中でも外国人観光客についてみていく。図3は2005年以降の由布市全体の外国人観光客の人数を示したものである。外国人観光客数は2007年に25万人まで達したが、2009年の新型インフルエンザの世界的流行や2011年の東日本大震災による福島第一原発事故の影響によって減少した。近年は持ち直しており、2014年には再び20万人を超えて

いる。由布院駅近くで大衆食堂を営む方と由布市によれば、2015年は特に外国人観光客が増加した印象を持っているとのことだ。2014年や15年の増加については要因が不明であり、外国人観光客の増加は今後さらに注目していく必要がある。

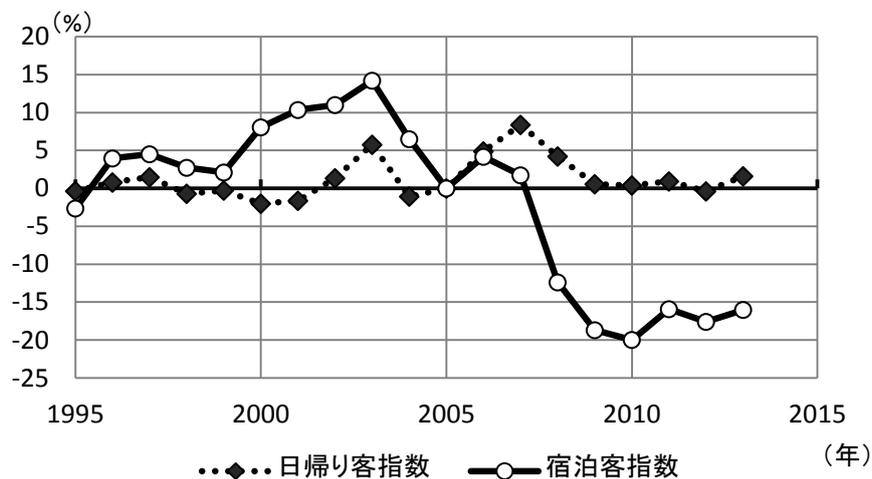


図2 旧湯布院町における日帰り客・宿泊客（2005年を基準）

出典：由布市観光動態調査，由布市へのヒアリング

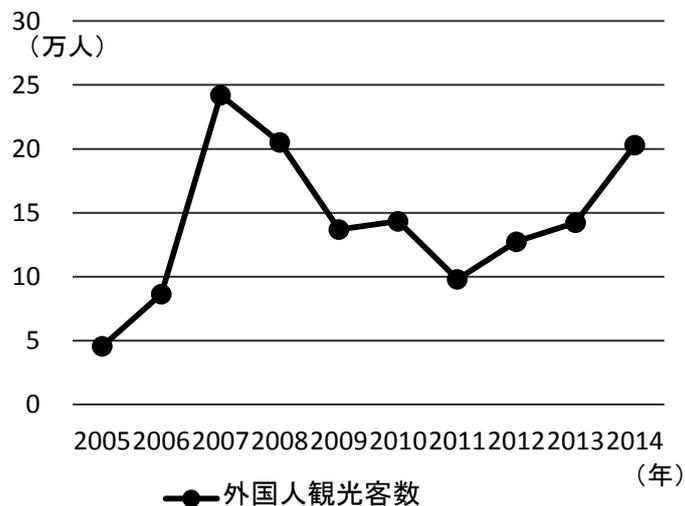


図3 由布市への外国人観光客数

出典：由布市観光動態調査

では国内を含めた観光客はどこから来ているのだろうか。図4と表5は2013年の由布市全体への発地別宿泊客の人数と割合を表したものである。観光の統計の特徴として、宿泊客は実数であるのに対し日帰り客は推計で表されるという点がある。そのためここではより正確性の高い宿泊客にのみついて考察する。

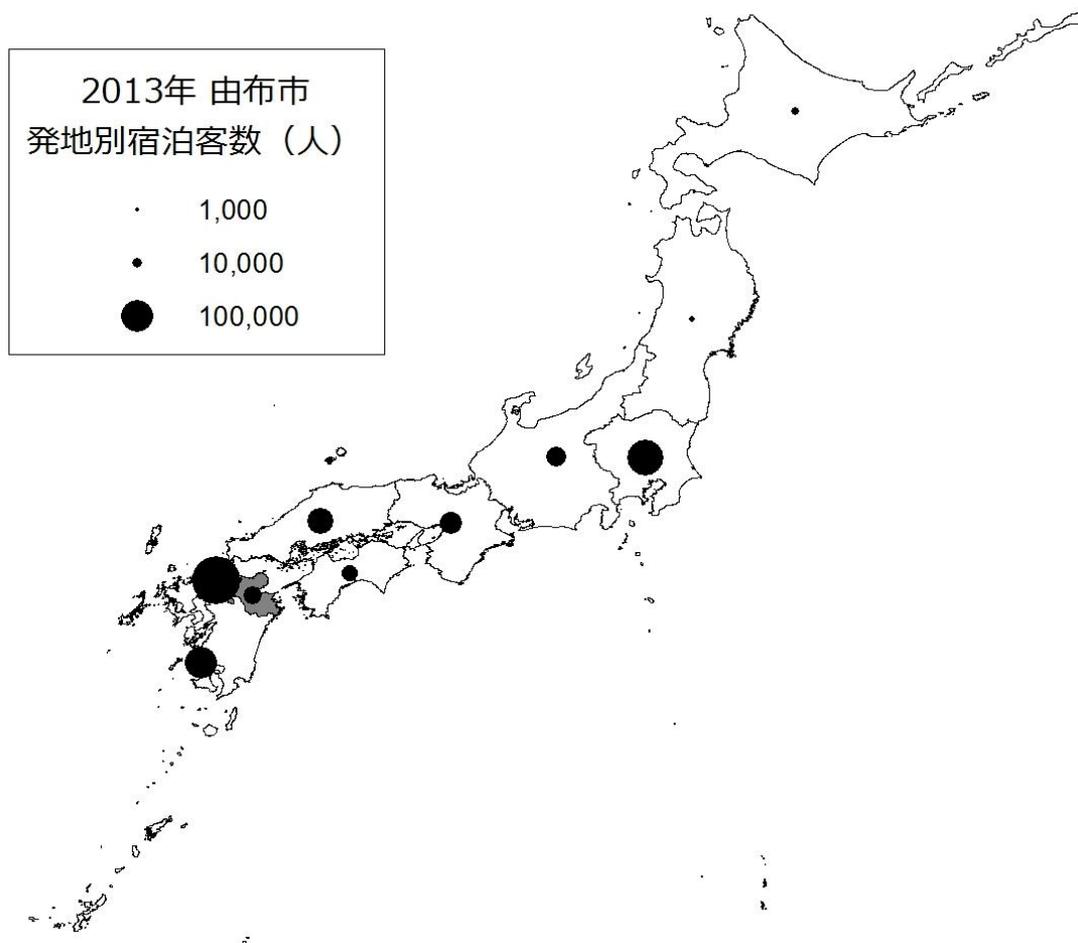


図4 由布市への発地別宿泊客数 (2013年)

出典：由布市観光動態調査

表 5 由布市への発地別宿泊客数と割合（2013 年）

出典：由布市観光動態調査

	合計（人）	割合
福岡県	246,694	32.6%
関東	129,888	17.2%
その他九州	110,710	14.6%
中国	66,027	8.7%
近畿	51,661	6.8%
海外	45,599	6.0%
中部	38,596	5.1%
大分県	32,825	4.3%
四国	25,677	3.4%
北海道	5,615	0.7%
東北	3,298	0.4%
<b>合計</b>	<b>756,590</b>	

大分県、福岡県、その他九州（大分県と福岡県を除く 6 県）をあわせると 51.5%となり、由布市を訪れる宿泊客の半数は九州から訪れていることになる。特に福岡県からの宿泊客が最も多い。その他の地域に目を向けると人口の多い関東以外は距離が離れるごとに割合が低下していく。2003 年のピーク時には 300 万人近くの日帰り客が訪れている由布院だが、経済効果の観点からみると宿泊客が 70 万人訪れるほうが高い。由布市観光動態調査によると、2013 年の由布市における観光消費額は約 141 億円であり、うち宿泊客の消費額は宿泊費を含めて 103 億円になる。1 人あたりの観光消費額は明らかに宿泊客のほうが高い。また海外からの観光客は個人旅行が多く、JR やバスを使ってまとまって訪れる人が多い。外国人観光客の発地としては、中国、韓国、台湾が中心で、最近タイからも訪れる人が多いとのことだ。

ここからは、由布院の宿泊施設や飲食店の分布をもとに、由布院という地域をみていく。図 6 と図 7 は、2015 年の由布市湯布院町における宿泊施設や各店舗の分布をまとめたものである。

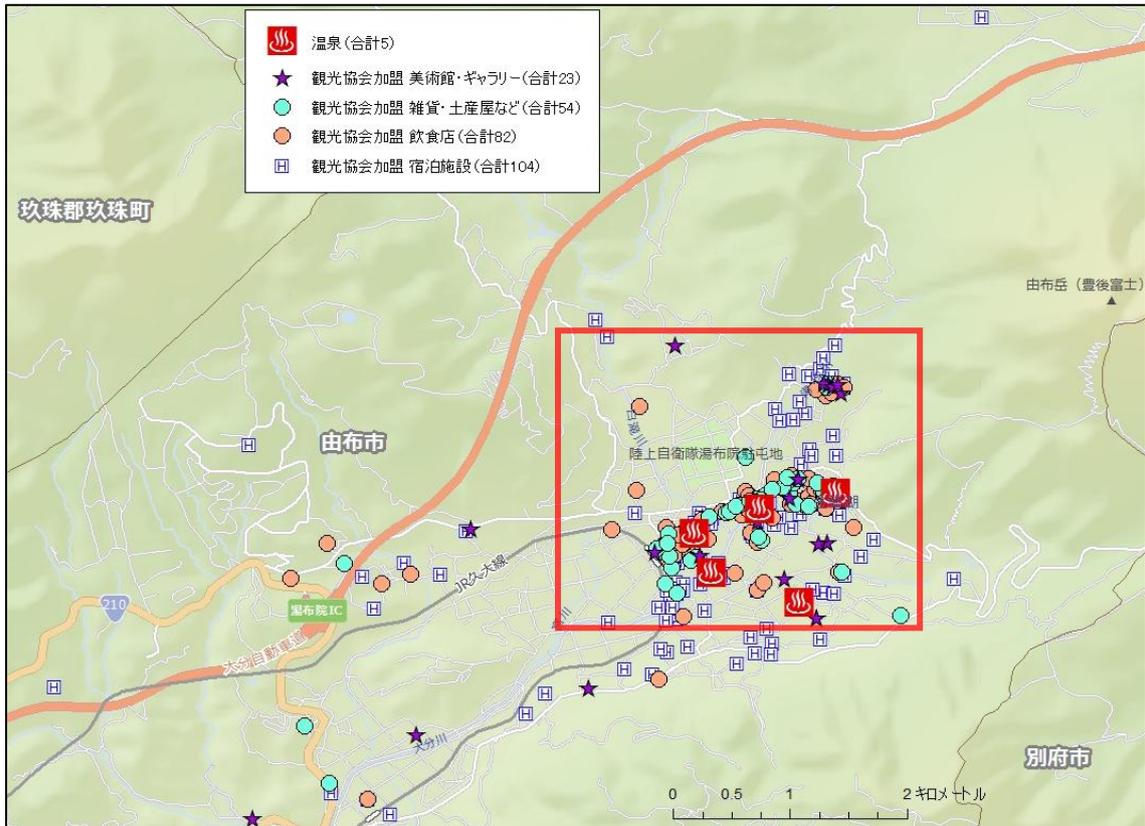


図 6 由布市湯布院町の宿泊施設や各店舗の分布

出典：由布院温泉観光協会 HP

図 6 をみると、由布院駅やそこから続く湯の坪街道に多くの店舗や施設が集中している。駅と図の右端にある由布岳とを結ぶ線上に店舗（雑貨屋・土産屋・飲食店）や施設が集中しており、由布岳を望みながら街歩きができる場所として観光客には人気が高い。大分自動車道の湯布院インターチェンジ付近にも店舗がある。自動車由布院を訪れる観光客や、別府・大分方面へ向かう人が立ち寄るためと考えられる。温泉は 5 ヶ所あり、規模の大小は異なるが全て公衆浴場となっている。宿泊施設は店舗と比べて分散している傾向があり、町の中心部から少し離れた場所に多く立地している。

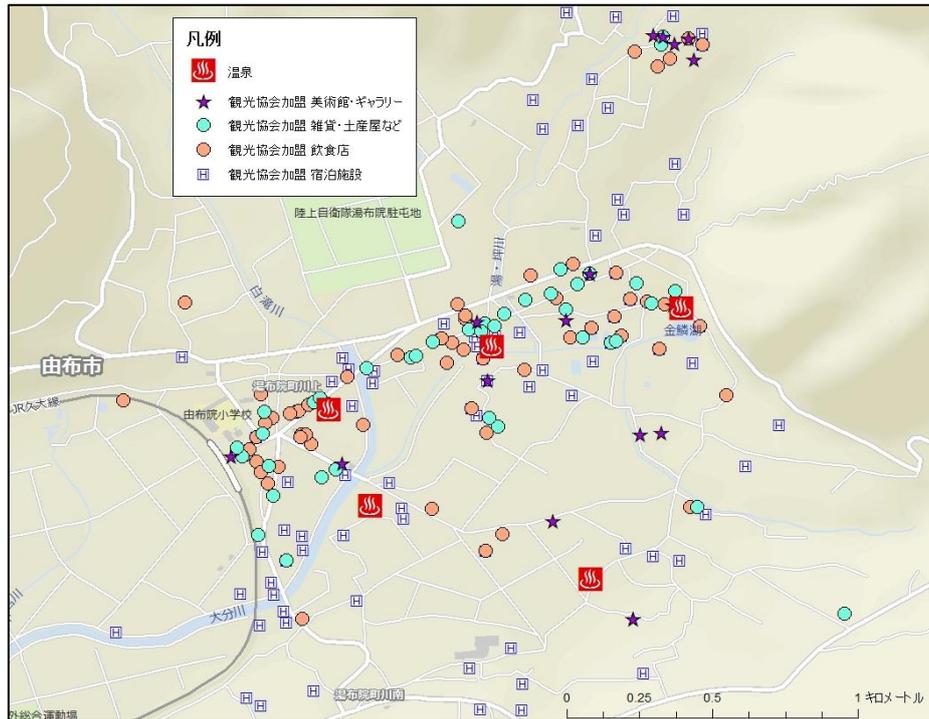


図 7 湯の坪街道周辺の宿泊施設や各店舗の分布 (図 4 の赤枠内)

出典：由布院温泉観光協会 HP

図 7 でさらに細かな分布をみると、駅から 250m 北西方向に進んだ交差点では、店舗がみられない。これは観光協会の HP から観光客向けの店舗のページをピックアップしたため、実際には住民向けの店舗が複数ある (JA の直売所、仏具屋など。2015 年 9 月の筆者の調査)。駅から北東に 1km ほど離れた湯の坪街道には雑貨・土産店が多く立地している。由布院観光総合事務所への聞き取り調査によれば、加盟店舗それぞれの開業年は不明だが、大半はここ 20 年ほどで開業したとのことだ。そこで今回は、住宅地図と筆者の現地調査をもとに 1999 年から 2015 年にかけての湯の坪街道の街並みの変化を分析していく。

### 3. 由布院の観光とまちづくりの歴史

湯の坪街道の街並みの変化を分析する前に、由布市 (または湯布院町) にはどのような出来事があったのかを、観光とまちづくりの観点からみていく。表 8 にそれらをまとめた年表を作成した。

表 8 由布院の観光とまちづくりの年表

年	観光	まちづくり
1952		由布院盆地ダム化する計画案が持ち上がる
1953		住民の反対, 資金面の問題などによりダム計画が打ち切りとなる
1956		自衛隊の湯布院駐屯地が開設する(隊員700人)
1959	湯布院町が国民保養温泉地に指定	
1964	九州横断道路が全線開通	
1971		「明日の由布院を考える会」発足
		若手旅館経営者3人が50日間のヨーロッパ視察を実施 ⇒クアオルト構想実現への働きかけが始まる
1975	大分県中部地震発生	
	初めて辻馬車が走る	
	第1回ゆふいん音楽祭	
	第1回牛喰い絶叫大会開催	
1976	第1回湯布院映画祭	
1987		総合保養地整備法(リゾート法)の施行 ⇒外部資本によるリゾート開発の波が押し寄せる
1989	「特急ゆふいんの森号」運転開始	
1990	新由布院駅舎完成	
		「潤いのある町づくり条例」が成立
1994	九州横断道路(やまなみハイウェイ)無料化	
1996	大分自動車道が全線開通	
1999		1991年の「湯布院町総合計画」を見直し, 「ゆふいんの森構想」を スタートさせる
2004		「景観法」の施行
2005		挾間町・庄内町と合併し, 由布市に
2006		「湯の坪街道周辺地区景観づくり検討委員会」の発足 ⇒住民らがルール of 明文化に乗り出す

出典: 「ふるさと ゆふいん物語」 から筆者作成

1952年, 由布院盆地をダム化して別府海岸に水力発電所を建設し, 電気化学工場に電力を供給, ダム化された由布院盆地を人造湖として観光地にしようという計画が持ち上がった。町の執行部と議会は計画を推進したが, 町民との間に賛否両論が飛び交い, 町を二分するまでに発展した。住民側からは青年団と農業団体が明確に反対, さらには資金難もあって計画は1953年に打ち切りとなるが, まちづくりについて住民一人ひとりが個々の問題として真剣に考える大きなきっかけとなった(由布市 2005)。

ダム化が打ち切りになった後, 湯布院町(当時は由布院町, 1955年に湯平村と合併して湯布院町となる)に自衛隊を誘致する話が持ち上がった。ダム問題とは異なり, 町の執行部, 議会, 農業団体と青年団を含む住民ともに誘致運動を行い, 1956年に湯布院駐屯地を開設することができた。由布市への聞き取りによると, 自衛隊の駐屯地は人口の増加だけでなく国から交付金が与えられ, その交付金で公民館を作り住民の自治力を高めるなど, 様々な効果をもたらしている(由布市 2005)。

1959年, 湯布院町は九州で2番目の国民温泉保養地となる。当時の由布院は「奥別府」

の呼称で誘客を図っていたが、町長は別府とは異なる健康で明るい温泉地づくりに徹するべきだと唱え、厚生省に働きかけたためである。

1964年に九州横断道路（別府，由布院，九重，阿蘇などを結ぶ）が全線開通し，由布院への交通の便が良くなる。これによって一躍全国的に注目を集めるようになった。観光客が増加したのはもちろん，不動産業者や開発業者も由布院に興味を示すようになった。九州横断道路の開通は，外部の人々に様々な影響をもたらした。

1970年，別府から湯布院町に向かう途中の猪の瀬戸にゴルフ場を建設するという話が外部から上がったが，自然保護のために反対運動を行い，建設の阻止に成功した（由布市2005）。この運動がきっかけとなり，1971年に若手の旅館経営者が中心となって「明日の由布院を考える会」が発足した。自然を破壊して観光地を造りだすことが一般的だった当時，このような動きは珍しかった。この会の発足により，住民は幅広いビジョンでまちづくりを考えるようになっていった。同年，若手旅館経営者3人がヨーロッパ視察を行った。外から訪れるお客様を大切に受け入れるという心づかいや気づかい，生活の中に旅行者を受け入れる姿勢を学んだとのことだ。ヨーロッパから帰国後「最も住みやすい町こそ優れた観光地」というクオアルト構想が由布院でも推進されるようになった。温泉，芸術文化，自然景観といった生活環境を整え，住民の暮らしを充実させ，由布院独自の温泉保養地を形成しようというものであった。

1975年に発生した大分県中部地震は，由布院の観光において大きな危機だった。由布市へのヒアリングによると，湯布院町を襲ったM6.4の地震によって由布院が壊滅したという過大な情報が流れ，由布院は風評被害を受けたという。だがこの危機をチャンスにとらえ，辻馬車を走らせる，音楽祭や牛喰い絶叫大会，翌年には映画祭といったイベントを行い，情報発信や集客を行った。その結果由布院は温泉保養地としてのみでなく，芸術文化的なイメージも高まっていく。

1987年に「総合保養地域整備法」が施行される。朝日新聞（1987）によると，この法律は「国民が余暇を利用して自然の中でスポーツ，レクリエーションを楽しめるよう，リゾート地域を整備する。都道府県が基本構想を作って国の承認を受けるが，具体的な開発，施設建設は民間活力にゆだねる。誘導策として国，地方税の減免措置や融資制度を設ける。」というものである。この法律によって地方でもリゾート開発が行われ，観光客や宿泊客が増加した。一方でリゾート開発に伴い，農地は次々に身売りされていった。1989年にJR九州が特急「ゆふいんの森」の運転を開始，90年には新駅舎が完成と，公共交通機関を利用して訪れる観光客も由布院を楽しめるようになった。由布院の人気の高さや期待が感じ取られるが，これらによって外部からの開発による由布院のリゾート化がさらに進行していったと考えられる。

1990年に湯布院町は「潤いのある町づくり条例」を制定する。池内・朽木（2007）によると，この条例は「『外部からの大型資本による無計画な開発は，自然環境の破壊，無秩序な景観の乱造を招く』との認識から『成長の管理』を理念とし，…」とある。国のリゾー

ト開発を進めようとする方針とは全く逆の条例である。しかし、この条例は大規模な開発を対象としていたため、雑貨・土産店などの小規模なものに対しては効力を持たなかった。結果として観光客をターゲットにした土産店は由布院ならではの商品を扱う店舗ではなく、どこにでもあるような商品を扱う店舗が大量に並ぶ状態が続いた。

1994年には九州横断道路（やまなみハイウェイ）の無料化、1996年には大分自動車道が全線開通と、交通のアクセスがさらに良くなる。

1999年、湯布院町は91年に策定した「湯布院町総合計画」を見直し、「ゆふいんの森構想」をスタートさせた。町全体を森に例え、1人ひとりが気を植え育てるように町民と行政が一緒になって町づくりになるための政策を掲げている。

2004年、国によって景観法が施行された。景観法は、景観行政団体になった自治体が建設のデザインや色の規制を盛りこんだ「景観計画」を定め、適用する「景観計画区域」内では自治体への届け出が必要になる制度である。また、自治体は届け出に対して勧告したり命令したりもできる。2013年1月1日現在で568の景観行政団体があり（国土交通省）、由布市は2005年に景観行政団体になっている。

2006年、「湯の坪街道周辺地区景観まちづくり検討委員会」が発足する。湯の坪街道の商店は落ち着いた雰囲気を出そうと工夫をしてきた。朝日新聞（2008）によれば、あえて入り口を道路から離してゆとりのある空間を設ける、派手な看板を作らないといったことが例として挙げられている。これらは街道の雰囲気を守るため暗黙のルールとして続けられてきたが、2000年前後から外部の業者が出店し始め、雑多な街並みとなってきた。委員会はこの状態を解消するため住民らによって発足した。ルールを明文化するため景観法に基づいて建物のデザインを規制できる「景観計画」と、自主的なルールとなる「景観協定」を作成した。朝日新聞（2008）によれば、外部からの出店を排除するためではなく、10年、20年、30年後に観光客から愛され、住民が誇れる景観を守っていくことが目的であるようだ。

ここまで由布院の観光とまちづくりの歴史をみてきたが、由布院の観光はまちづくりと密接に関わっていることがわかる。戦後のダム計画や自衛隊誘致によって住民がまちづくりに積極参加する機運が生まれ、ヨーロッパに学んだ住みやすい町をつくる大切さ、外部の出店にも理解を求めるとして住人が中心となって動く。由布院観光総合事務所での聞き取り調査によれば、「観光地をつくろうとは思っていない。誘致も行っていないし、地元の人も店舗の増加を好ましいとも思っていない。」とのことだ。由布院の観光はまちづくりを前提として成り立っていると行って良いだろう。

#### 4. 湯の坪街道の移り変わりについて

ここまで由布院の観光とまちづくりをみてきた。ここからは特に近年脚光を浴びている湯の坪街道に焦点を当てていく。第1章で述べたように、湯の坪街道の土地利用の研究に

は小堀（2000）があるが、それ以降は行われていない。加えて、第2章では由布院観光総合事務所への聞き取り調査から1995年頃より店舗が増加していったと述べた。また、朝日新聞（2001）には「（湯の坪街道には）町外資本を中心に約200軒がひしめき、その約8割がこの5年の間に集中的に増えた」という記事も見られる。また、はじめに述べたように湯の坪街道と呼ばれ始めたのは2000年頃と考えられる。以上のことから、1990年代後半からの湯の坪街道の変化を分析することは、由布院の観光とまちづくりを考える上で重要だと考える。

分析には1999年、2004年、2010年、2014年のゼンリンの住宅地図を用いて、概ね5年ごとにみていく。2014年については、2015年9月に筆者の巡検結果も反映させてあるため、2015年の店舗分布として扱っていく。今回の分布図は過去の住宅地図をもとに作成したため、店舗名のみでは分類が出来ない場合がある。その際は全て「不明」として分類した。また新たにできた店舗は観光客向けの店舗である可能性が高いため、商店や美容室といった地元住民を顧客としていると思われる店舗については「一般商店」として一括りに分類した。スーパーマーケットは「その他の店舗」に分類し、公園や公衆トイレは「その他の土地利用」に含めた。次に示す図9～12は、湯の坪街道における土地利用をまとめたものである。また、表13は地図中で分類されたものの合計値をまとめたものである。

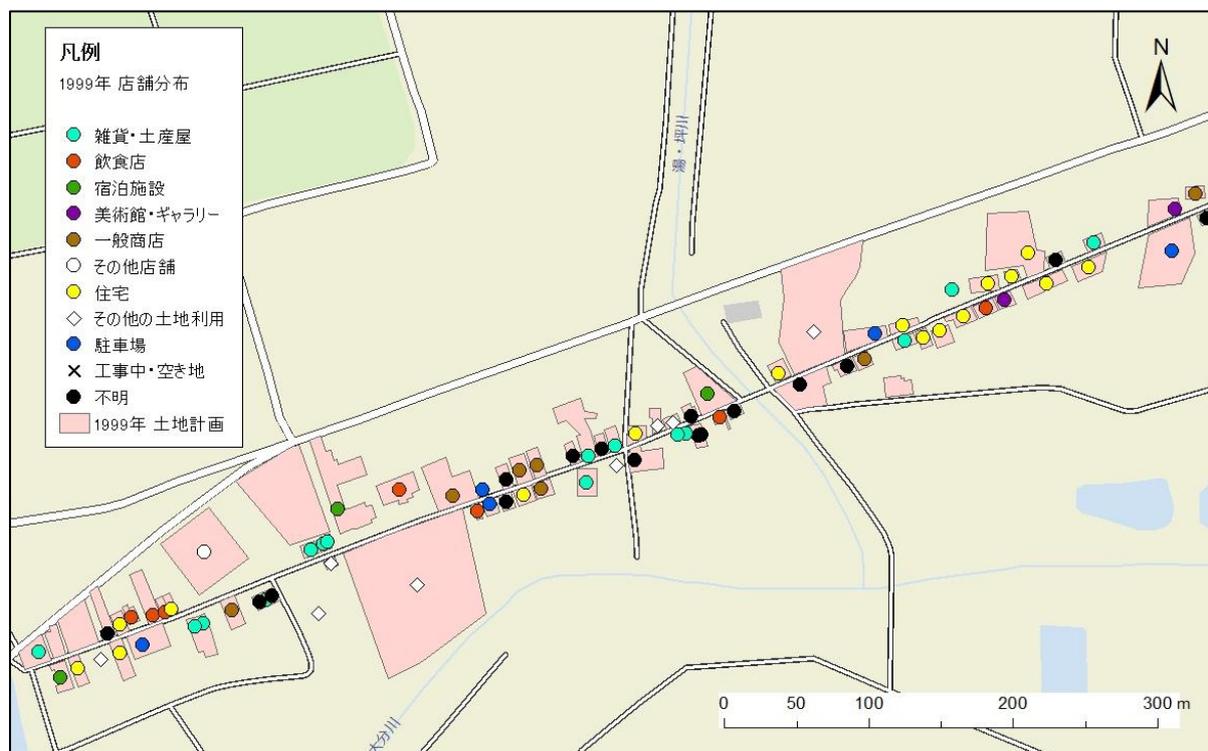


図9 湯の坪街道の土地利用（1999年）

出典：1999年ゼンリン住宅地図より筆者作成

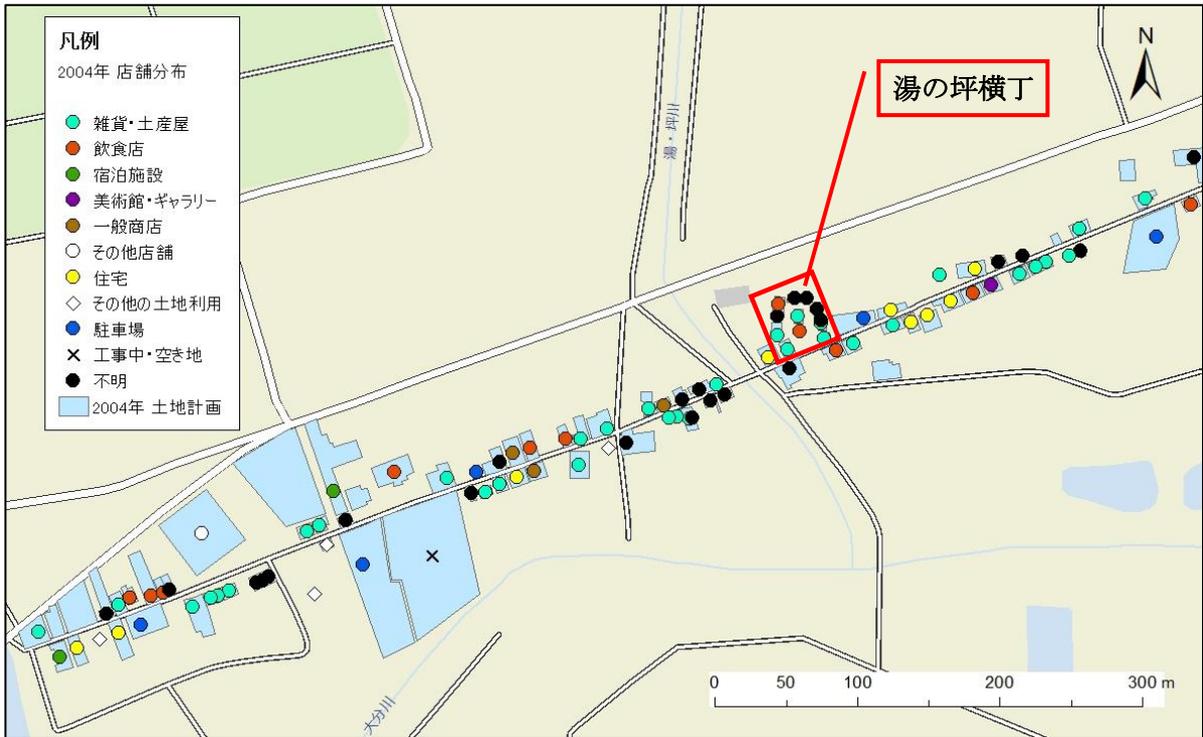


図 10 湯の坪街道の土地利用（2004年）

出典：2004年ゼンリン住宅地図より筆者作成

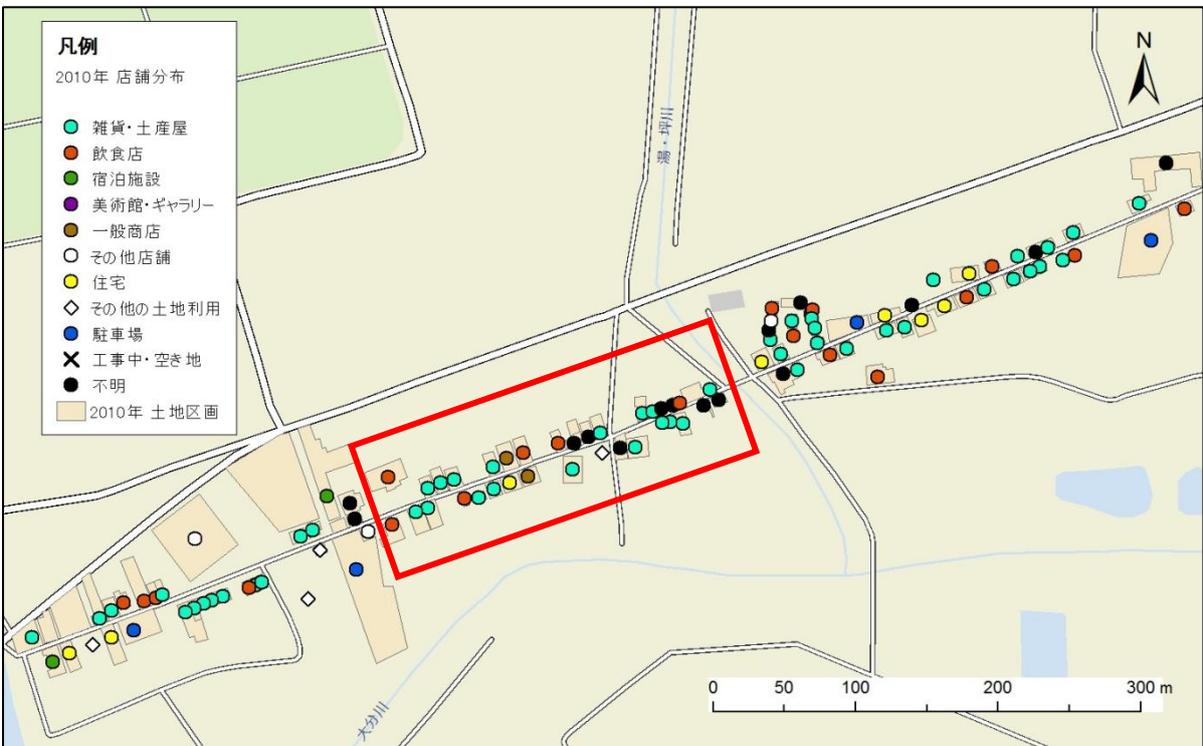


図 11 湯の坪街道の土地利用（2010年）

出典：2010年ゼンリン住宅地図より筆者作成

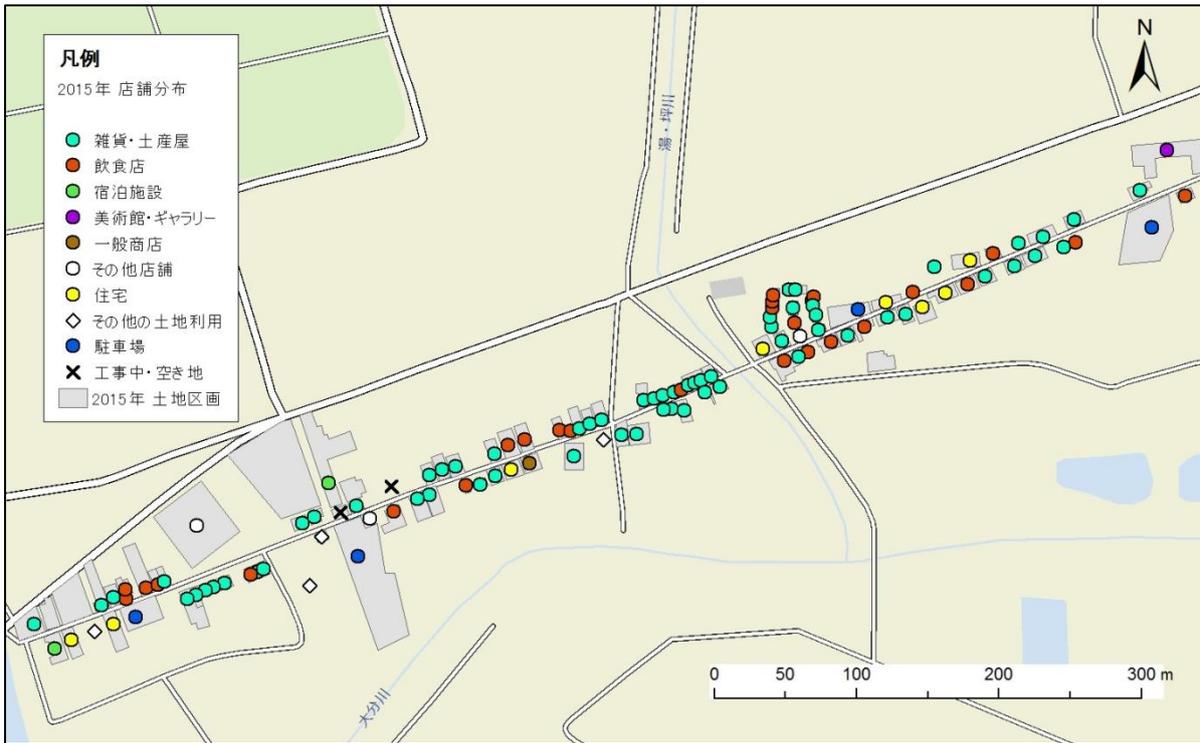


図 12 湯の坪街道の土地利用（2015 年）

出典：2014 年ゼンリン住宅地図より筆者作成

表 13 湯の坪街道における店舗数の変遷

	1999年	2004年	2010年	2015年	
雑貨・土産屋	15 ⇒	33 ⇒	50 ⇒	63	雑貨・土産屋
飲食店	7 ⇒	10 ⇒	20 ⇒	27	飲食店
宿泊施設	3 ⇒	2 ⇒	2 ⇒	2	宿泊施設
美術館・ギャラリー	2 ⇒	1 ⇒	0 ⇒	1	美術館・ギャラリー
一般商店	7 ⇒	3 ⇒	2 ⇒	1	一般商店
その他店舗	1 ⇒	1 ⇒	3 ⇒	3	その他店舗
住宅	16 ⇒	9 ⇒	8 ⇒	8	住宅
その他の土地利用	8 ⇒	4 ⇒	4 ⇒	4	その他の土地利用
駐車場	5 ⇒	5 ⇒	4 ⇒	4	駐車場
工事中・空き地	0 ⇒	1 ⇒	0 ⇒	2	工事中・空き地
不明	16 ⇒	24 ⇒	15 ⇒	0	不明

まず図 9 と図 10 より 1999 年から 2004 年にかけての変化を考察する。この 5 年間は、湯の坪川より東側で変化が大きい。1999 年までは荒地であった場所に湯の坪横丁（図 10 赤枠）が新たにできた。この横丁だけで 12 店舗が新たに開店しており、新たな観光スポットになったと考えられる。また、民家が立ち並んでいた場所が「雑貨・土産屋」に変化している。それぞれが変化した要因は個別に聞き取りを行う必要があるため不明である。し

かし、この章の最初に述べたように8割の店舗が2001年までの5年間に増えたという事実を踏まえると、湯の坪川より東側の地域は町外からの店舗進出の影響を特に受けていると判断できる。表13で店舗数をみても、「雑貨・土産屋」が15から33に大幅増加していることがわかる。

続いて図10と図11より2004年から2010年までの変化をみていく。この6年間では図9の赤枠で示した地域の店舗分布に変化が生じている。赤枠内の左側の地域では土地区画の細分化がみられ、一方右側では1つの建物の中に複数の店舗が営業している店舗も多い。店舗数からみても、「雑貨・土産屋」と「飲食店」が6年間でさらに増加していることが表13よりわかる。

図11と図12より2010年と2015年を考察する。2015年の筆者の巡検結果も含めてあるため、全ての店舗が正確に分類できている。概ね変化はないが、図中央部、湯の坪川のすぐ西側の地域で店舗がさらに細分化されている。

1999年から2015年までを通してしてみると、2つの傾向が挙げられる。1つに民家の減少がある。観光客の増加によって退居したのか、土地を売却したのか、店舗業者に土地や建物を貸しているのか、詳しい理由は不明であるが、様々な理由が考えられる。由布院観光総合事務所への聞き取り調査によると、湯の坪街道に暮らす人々は観光客の増加に対して良くは思っていない。観光客の増加によって人が増え、車で出かけられないといった、日常生活にも影響が出ているとのことだ。また住民も観光協会も、湯の坪街道が本当の由布院とも思っていない。2つ目の傾向として土地や建物の細分化がある。1つの住宅や荒地のあった場所に複数の店舗が並んでいる。民家の減少同様、どのような背景でこのようになったのかは不明であるが、観光客が増加したことで町外資本による観光開発が行われたことと関連があると考えられる。

## 5. 店舗や旅館を営む人の考え

前章では湯の坪街道が20年間で変化していることがわかった。ここからは、由布院で店舗や旅館を営む方への聞き取り調査をもとに、湯の坪街道は由布院の人々にどのようなイメージを持たれているのか、変化していることや現状についてどのように感じているのかを探っていく。

まず、ジャム工房や販売を営む方に話を聴いた。店を訪れるのは観光客で、特に女性が多いという。由布院に対して持つイメージとして、「湯の坪 = 由布院のメインブランド」では決してないということだ。「川沿いや田園風景も含めて由布院であって、買い物をするスポットだけが由布院ではない。湯の坪街道が由布院のメインストリートという表現はある雑誌が使い始めたもので、決して由布院からの発信ではない。30年ほど前から由布院を訪れる人は湯の坪街道には行かない上、通りたいとも思っていないようだ」と述べている。これらのことから、観光客がどこから由布院の情報を得ているかがわからないという悩み

があるようだ。訪れた人の口コミやブログから発信されるために、観光客が元々持っていた由布院に対する嗜好とのズレが発生しやすくなると考えられる。そのため、実際に由布院を訪れてみるとイメージと違ったという観光客もいるようだ。この店舗は2001年から湯の坪街道に出店しているが、当時は現在ほど店舗が立ち並んでいなかったという。かつては看板の設置にも縛りは無く、他店舗や景観にも配慮するという暗黙の了解が存在した。その後店が増えていくにつれ、無秩序な街並みになることを防ごうと条例が設けられた。しかし、一度条例を設けてしまうと条例に明文化されていないことは問題なしという考えも生まれ、さらに町外からの出店を許してしまったのでは…とも考えている。観光地とまちづくりについては、まちづくりの延長に商売があり、まちづくりと商売は一緒に行く。「この店、由布院にあるから良いよね」を追求していくとのことだ。

次に、湯の坪街道付近で旅館を営む方に話を聴いた。開発が一気に進行したのは15年ほど前からであり、湯の坪街道の変化については、利便性が高くなるという利点はあるが、開発に対しては快く感じていないようである。この旅館では由布院らしさを「文化の受け入れと発信が当たり前でできること、何もないところだからこそいろいろな文化が融合し、由布院らしさは生まれる。何もないこと、それが由布院の良さだ」としている。

2人の考え方からわかるのは、由布院といえば「湯の坪街道」ではないし、そのイメージは外部から勝手に付けられたこと。つまり由布院に暮らす人々の由布院のイメージと、観光客や外部から出店しようとする人々の思い描く由布院のイメージは異なったものということである。由布院の人々にとって由布院は「まちづくりが第一」としてあることである。第3章で述べたようなクアオルト構想が住民に浸透していると言える。一方で観光客は「湯の坪街道はすばらしい観光スポット」というイメージが先行してしまっている。おしゃれなお店が揃い、町歩きができる。そのような観光客をターゲットに新たな店舗が出店してくる。住民は快く思っていないが、行政による規制も十分ではないのが現状ではないだろうか。

## 6. おわりに

由布院の観光とまちづくり、特に湯の坪街道の変化について述べてきた。由布市は性格の異なる3町村が合併してできた市である。湯布院町に限ってみると、年間300万人を上回る観光客が訪れる町であり、由布院駅周辺や湯の坪街道を中心に店舗が立ち並ぶ。湯の坪街道では1995年ごろから店舗が増加していったことが聞き取り調査からわかった。湯布院町の観光とまちづくりの歴史をみていくと、観光とまちづくりは密接に関わっており、まちづくりを前提として観光が成り立っている。

1999年からの湯の坪街道の変化を考察すると、民家の減少、土地や建物が細分化されたという2つの特徴がある。それぞれの詳しい理由は不明だが、観光客の増加や町外資本による観光開発の影響があると考えられる。ヒアリングからは古くからの店舗や旅館と町外

資本の店舗の間には少なからず軋轢があることが読み取れる。湯の坪街道が由布院のメインストリートであるという捉え方は由布院の人々が言い始めたわけではない。また、文化の交流が当たり前でできるということが、由布院らしさであり、何もないことが由布院の良さだという。

近年、まちづくりを行う上で新たな問題が出てきた。市町村合併によって意思の統一が難しくなったことである。湯布院町は、庄内町、挾間町と合併して、2005年に由布市が誕生した。朝日新聞（2013）によると、合併によって庄内と挾間の観光や暮らしについても考える必要があるため、市で意思の統一が困難になっているとのことだ。具体例としては2012年、由布院駅の渡線橋へのエレベーター設置問題があった。由布市の観光にとって重要な駅であり、地元住民も要望書を提出した。しかし、市議会の委員会の反応は「旧挾間町の向之原駅には医大と病院があり、こちらの渡線橋には屋根がない。市民の利用は向之原のほうが多く、周りの駅のことを考えていないのでは」というものだった。図1の人口増減率が3町で大きく異なるように、性格の異なる町が合併してできた市である。市の執行部や議会と住民、観光協会との意思統一ができておらず、距離が拡大しているのではないだろうか。湯の坪街道をはじめ、街並みの変化は今後も続いていくが、市と観光協会、住民の連携をより強くしていかなければ、観光地としての由布院、住みよい町としての由布院の両方が崩れる恐れがある。

観光総合事務所への聞き取りによれば、観光客の誘致活動などの表立った活動はほとんど行っていない。住民が暮らしやすくなるため、受け入れ環境を把握・整備し、観光客の数のコントロールすることも観光協会の役割であるようだ。観光地として発展する前に、自分たちが暮らしやすいことが前提としてある。また、観光総合事務所での聞き取り調査より、PRを行うよりも由布院へ来た旅行者への対応を大切にしていることがわかった。観光総合事務所によれば「訪れた人たちの口コミによって由布院の情報が広まっていく。誘致活動は行う側の自己満足で終わることも多いため、それよりも来ていただいた方に何度も来てもらえるようにしたい」と指摘している。住民にとっても観光客にとってもプラスになる場所を作るために、おもてなしの考えが大切と言えよう。

今回は湯の坪街道の移り変わりについて考察をしたが、個別に要因を調査する必要があるため、詳細な変化までは分析ができなかった。その点については、今後の課題としておきたい。

#### —謝辞—

本稿を作成するにあたり、由布市環境商工観光部商工観光課の高田信明様、佐藤美和子様、由布院温泉観光協会の生野敬嗣様、「ことことや」の淵野恵太様、「草案秋桜」代表取締役の太田慎太郎様、「大衆食堂くんちゃん」の溝口みきえ様には、お忙しい中にも関わらず大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

● 参考文献

- ・大分県 温泉データ (2015年12月22日閲覧)

<http://www.pref.oita.jp/site/onsen/onsen-date.html>

- ・リクルートライフスタイル 『じゃらん人気温泉地ランキング 2016』投票結果報告  
(2015年12月22日閲覧)

[http://www.recruit-lifestyle.co.jp/uploads/2015/12/RecruitLifestyle\\_20151208.pdf](http://www.recruit-lifestyle.co.jp/uploads/2015/12/RecruitLifestyle_20151208.pdf)

- ・妻鹿奈緒美・橋本雄一 2006. 登別温泉観光集落における土地利用の変化. 北海道地理 No.81 39-44.

- ・小堀貴亮 2000. 由布院温泉における芸術文化観光空間の形成と構造. 地域社会研究 第3号 20-33.

- ・下中弘 1995. 「大分県の地名」500 平凡社

- ・由布市 2005. 「ふるさと ゆふいん物語」 由布市商工観光課 編

- ・朝日新聞 (1987年5月28日, 4頁) 「今国会で成立した法案 注目法案は継続審議」

- ・池内秀樹・朽木弘寿 2007. 「観光まちづくり」の成果と課題——由布院温泉・黒川温泉を事例として——. 地域創成研究年報 (2) 155-174

- ・朝日新聞 (2001年12月22日, 西部版1頁) 「大分・湯布院の憂うつ あふれるゴミ, 車は渋滞…」

- ・朝日新聞 (2013年10月17日, 大分全県35頁) 「違う特性 育たぬ一体感」